

[研究ノート]

# 2011年度宮城ボランティア活動と その教育的意義

敬愛大学国際学部の場合

櫛田 久代

## Educational Achievements of the First Volunteer Trip Supported by Keiai University after the 2011 East Japan Earthquake

Hisayo KUSHIDA

After the gigantic East Japan Earthquake of 11 March 2011, a number of extremely destructive tsunamis and a consequent nuclear accident struck East Japan. The tsunamis took many lives and destroyed houses, schools, and other buildings in the Pacific region from Iwate Prefecture to Chiba Prefecture. Thousands of volunteers including many from corporations, local governments, and internal and international non-governmental organizations (NGOs) rushed to the Tohoku area to help provide psychological and material support to disaster victims. Although the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology had promoted volunteer programs in educational institutions from primary school to the university, the Ministry officially announced on 1 April 2011 that universities should make arrangements in their regular classes to encourage student volunteer efforts in the Tohoku area. This official notice encouraged university volunteer activities in the area. Efforts not only from students but also from volunteer trips organized by universities provided disaster relief, includ-

ing such activities as cleanup, debris removal, and providing food, during the spring term.

Keiai University in Chiba Prefecture also embarked on volunteer activities after the East Japan earthquake and organized a volunteer trip of 3 days and 2 nights from September 21 to 23 in Miyagi Prefecture. This was the first Miyagi volunteer trip organized by the university. Twenty-eight students and three staff members joined the trip and were engaged on September 22 and 23 in building flower beds, removing dead morning glories, and holding a tea party for the inhabitants (disaster victims) in temporary housing. This paper examines the activities of the volunteer trip organized by the university and student feedback after the program from an educational point of view, making it clear that the volunteer trip functioned as an excellent service program for students.

【A research project supported by Keiai University in the year 2012】

## はじめに

平成7（1995）年1月17日の阪神・淡路大震災は、しばしば日本におけるボランティア元年と称されている。地震発生から4月中旬までの災害ボランティアの延べ人数は115万人と推定され、その半数が若者であり、若者の主力として活躍したのが大学生であったことが注目された<sup>①</sup>。その後、中越地震等大規模災害のたびに、日本全国からボランティアが駆けつける現象が当たり前に見られるようになった。平成23（2011）年3月11日に起こった東日本大震災においても、地方自治体および企業やNGOを含め全国から多数のボランティアが現地に駆けつけ災害救援にあたったことは記憶に新しい。

さて、東日本大震災の災害ボランティア活動において大学教育現場との関連で特筆すべきことのひとつは、平成23（2011）年4月1日文科科学副大臣名で出された「東北地方太平洋沖地震に伴う学生のボランティア活動について」の通知ではなかっただろうか。大学生のボランティア活動は、近年、文科科学省が「時代の変化や社会の要請に適切に対応した、

教育研究活動」の一環として推奨しており、全国の大学においても、ボランティア活動を取り入れた授業や講義科目が年を追うごとに増加していたが<sup>②</sup>、今回の通知は、「学生が、大学等の内外において、学修成果等を活かしたボランティア活動を行うことは、将来の社会の担い手となる学生の円滑な社会への移行促進の観点から意義がある」との大義名分を掲げ、通常授業期間中の学生の災害ボランティア活動を推進することを謳っていた。被災学生への配慮は当然のこととしてあったが、ある意味で、授業形態の柔軟な運用を通して、比較的時間に余裕のある学生を長期にわたる被災地の救援活動の核として活用する社会的仕組みを確保するものともいえた。大学におけるボランティア活動は、その単位化を巡って、ボランティア活動がそもそも主体的で自立的な無償の奉仕活動であるという原義から、今なお賛否両論ある。ましてや災害ボランティアは、学生が怪我をするリスクも抱えることから、学生の健康や安全の問題が取りざたされた。物議を醸し出した文部科学省の通知であったが、災害ボランティアの担い手として大学生が大いに期待されたということは間違いない。

実際、大震災の被災地では、望むと望まざるとにかかわらず、大学が地域の拠点としてボランティアの中心的役割を果たした。また、被災地の学生達も避難所における支援活動や後片付け等のボランティア活動に従事しており、学生にとってボランティア活動と大学教育との両立は現実問題としてあった。一方、被災地以外の大学においても、大学の社会貢献の観点から災害ボランティア活動の機運が高まり、大学ボランティアセンターを拠点に独自のボランティア・ツアーを主催して、被災地支援に積極的に乗り出した大学も多数に上った。本学においても紆余曲折はあったものの、同年9月21日から2泊3日、大学バスを利用した大学主催の第1回宮城ボランティア・ツアーが学外授業として実施された。

翌年の平成24(2012)年8月には大学主催として第2回となる宮城ボランティア・ツアーが行われた。第2回目実施の際には、東日本大震災から1年半が経ち、被災者の自立に向けた職業訓練や起業家支援といった

就職支援や、地域の再生を目指す長期的かつ専門的な復興支援活動が始まっていた。千葉県にある小規模私立大学である本学の被災地ボランティア活動のあり方も、2011年と2012年とでは必ずとその内容は変わってこざるを得ない。そこで、2012年の宮城ボランティア活動は、昨年度の活動を受け継ぎつつ、平成24(2012)年度敬愛大学研究プロジェクト「大学における震災ボランティア教育の実践研究」の一環として実施された。大震災を契機に起こった大学の被災地ボランティア活動を、大学および学生にとって一過性のものにさせないようにすることが、プロジェクト立ち上げの根底にあった。今後とも本大学が何らかの形で継続的に被災地と関わっていくことは、本学の社会貢献のひとつとしてのボランティア活動のあり方を含めた課題であるが、本学の被災地ボランティア活動のあり方を検討するのが本プロジェクト研究の目的ではない。本研究の目的は、東日本大震災を契機に始められた、本学の被災地ボランティア活動の実践とその教育上の成果について検討することにある。2度実施された宮城ボランティア活動が学生にもたらした教育的効果を検討するにあたり、本稿では、さしあたり、昨年(2011)年第1回宮城ボランティア活動とその後の活動を取り上げる。学生達が記した「2011年度敬愛大学学外授業活動報告集」を基に、一引率教員の立場から、ボランティア活動に参加した学生達の現地における活動やその後の行動を振り返り、彼らの学びを整理することを通して、本学における被災地ボランティア活動の教育的意義を明らかにしたい。

## 1. 第1回学外授業(宮城ボランティア・ツアー)の概要

自発性、無償性、公共性を旨とするボランティア活動に対する単位付与については、通常の講義科目の単位修得と比較して安易であるとみられがちであるがゆえに、少なからず反発もある。しかし、ボランティア活動の単位化に関して異論があったとしても、ボランティア活動が学生の社会体験および成長につながり、通常の講義にはない貴重な学びとな

ることに異論の声はない。

本学国際学部の場合、実践的なボランティア活動の単位化に関しては、従来はいくつかの条件を付していた。まず、講義科目である「ボランティア活動Ⅰ」修得のうえでの活動実践として、「ボランティア活動Ⅱ」の単位を付与する。また、ボランティア活動の実践に関しては、授業の中で、ボランティア活動実施の企画力を学んだ後に、おおむね3日以上<sup>1</sup>の活動に従事し、活動日誌と実際の活動風景を撮影した写真の提出を義務づけ単位を認定するというものであった。

しかしながら、東日本大震災後、文部科学省がボランティア活動を推奨したことで、本学においても授業外の被災地ボランティア活動を単位認定する動きが出てきた。実際、学生の中には、自発的に被災地におけるボランティア活動に従事する者もあり、これまでの単位認定とは異なるボランティア活動の単位化が認められるようになった。また、国内のあちこちの大学が積極的に災害ボランティア活動に乗り出す中、本学においても大学主催の被災地ボランティア活動実施の機運が高まってもいた。実現したのは学内の諸事情もあり震災から半年後の9月となったが、国際学部水口章教授が企画主導し、宮城県名取市にある尚綱学院大学との協力の下、28名の学生の参加と3名の教職員の引率<sup>2</sup>で大学主催の災害ボランティア活動が学外授業として実施された。この学外授業は、これまでのボランティア活動とはいくつかの点で異なるものとなった。

第1に、大学主催災害ボランティア活動ツアーであり、教職員が引率したことである。第2に、仙台空港の位置する名取市において被災者救援の中心として活躍する尚綱学院大学の協力を得て進められたことである。実施時期の9月末には、被災者達は避難所から仮設住宅に居を移しており、よく知られている避難所での活動、屋内外の片付けや瓦礫処理、泥かきといった活動ではなく、仮設住宅に住む被災者のためのボランティア活動を行った。第3に、経済学部と国際学部の両学部の学生が参加する学外授業として行われたことである。第4に、参加した学生には、国際学部の場合、従来の「ボランティア活動」だけでなく、「国内スクー

リング」「総合講座」科目として単位認定されることになり、災害ボランティア活動に参加しやすいように履修上柔軟に対応する措置がとられたことである。ちなみに、経済学部では、学生による自発的活動を主とする「敬愛プログラム」における単位認定となった。そして第5に、交通手段として大学バスを活用するとともに長戸路政行学園長からの寄付によって費用負担の面で、学生が参加しやすい環境が整えられたことである。また、仮設住宅の方々への菓子等の提供品に関して、千葉県下の複数の企業から協賛を得ることができた。さらに県下の高校から自主制作の音楽DVDの提供を受ける等、ボランティア活動実施のために各方面から支援を受けられたのは、当時の被災地支援の機運の表われでもあった。いずれにせよ、第1回宮城ボランティア・ツアーは、未曾有の大災害に対して、被災地のために何かできることをしたい、役立ちたいという当時の風潮や学内外の支援に支えられたものであった。

実施が夏休み末期の9月21～23日であったため、夏休み期間中に行われた事前学習への学生の集まりは思わしくなかったが、千葉県のマスコット「チーバ君」を被災地に連れていくことになったのは、参加学生達の事前の提案からであった。

このツアーに参加したのは28名で、その参加学生の内訳は、下記表1のようなものであった。いくつか特徴がある。まず、学年的に見れば、かなりばらつきがある。1・2年生の参加者が少なく、3年生の参加者が多かった。また、男女比率もかなり不均衡だった。女子学生の参加者が

表1 平成23(2011)年度の参加学生の内訳 ( )は女子の内訳

学部	国際学部		経済学部
	国際学科	こども学科	経済学科
1年生	1	4	2(1)
2年生	0	2	0
3年生	8	5(4)	0
4年生	4(1)	1	1
計	13	12	3

(注) こども学科の中には地域こども専攻を含む。  
備考：28名の参加者のうち、留学生8名。出身国の内訳は、ネパール3名、中国2名、バングラデシュ1名、ベトナム1名、モンゴル1名。

28名のうち6名で、男子学生の参加が圧倒的に多かった。さらに、国際学部と経済学部の両学部で参加者を募集したが、元々ボランティア活動がカリキュラムの中にある国際学部の参加者のほうが圧倒的に多かった。最後に、留学生の参加者も多く、全体比率で見れば、約28%に上った。多国籍の留学生の参加は、この第1回学外授業の特徴といえる。ちなみに、3年生以上の参加者が多かった理由について、若干の説明を加えたい。実施時期が9月末であったこと、また、従来のボランティア活動と異なり、参加費用がかかるため、東北の被災地のために何かをしたいという動機をもった参加者がいる一方で、ゼミとしての参加義務付けや、卒業に必要な単位獲得のために参加した学生達も少なからずいた。正直なところ、半数近くが積極的なボランティア活動志願者ではなかったのではなかろうか。その彼らの態度が宮城ボランティア活動を通してどのように変化していったのかについては後述するが、非常に興味深いものとなつた。

さて、現地における2泊3日のボランティア・ツアーは下記表2のようなスケジュールであった。

2泊3日の日程のため、バスによる移動が大半の時間を占めはしたが、現地では、名取市<sup>ゆりあげ</sup>関上地区の住民が移り住んだ<sup>めでしま</sup>愛島東部仮設住宅における屋内外のボランティア活動に従事した。また、この学外授業は台風15号の仙台北上と重なったため、予想外の悪天候で千葉―宮城間往復の移動が困難を極めたことは、今となっては良い思い出である。

2日目、大津波で甚大な被害を受けた被災地の関上地区を視察した後、ボランティア活動を行うスケジュールとなったのは、「学生達に被災地の現状を知ってもらいたい、また、現状を知ってこそ、被災者の気持ちに寄り添える」との尚絅学院大学エクステンションセンター庄司則雄氏の

表2 9月21日～23日実施の学外授業

1日目	千葉市稲毛区出発 → 現地着 → ホテル泊
2日目	名取市関上地区視察 → 活動 → ホテル泊
3日目	活動 → 現地発 → 敬愛大学稲毛キャンパス着 → 解散

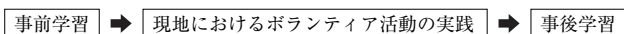
備考：参加費用15,000円（ホテル宿泊、現地における食事付き）。

助言からであった。関東地区では900人を超える方々が、津波によって亡くなっている。当時あちこちに漁船が打ち上げられたまま、家々の土台をわずかに残して更地になった沿岸部の光景を目の当たりにしたことで、学生達のボランティア活動への気持ちが高まったことは疑問の余地がない。津波の被災地視察後沿岸部を離れ内陸部にある愛島に移動し、悪天候の中、本学学生によるボランティア活動が始まった。2011年に愛島東部仮設住宅において本学が取り組んだボランティア活動は、①花のある暮らしを提供するために仮設住宅における花壇の設置（3箇所）、②心をつなぐ語らいの時間として仮設住宅集会所における茶話会の主催、③各戸への花の苗配り、④各戸の朝顔の蔓の撤去作業、⑤「チーバ君」と遊ぼうの5つの活動である。仮設住宅においてスムーズに活動ができたのは、コーディネーターとして仮設住宅で被災者の支援にあたっている尚綱学院大学の教職員の方々ならびに学生達の存在が大きかった<sup>3)</sup>。

## 2. 宮城ボランティア活動ツアーの学習プロセス

### 1 第1回学外授業後の事後学習

本学の学外授業は、実のところ、被災地の現状を知るスタディ・ツアーとボランティア活動の2つを柱としていたといえる。現地を知り、実際にボランティア活動に従事することは、それだけで大きな学びである。しかしながら、現地で何を学び、それをいかに個々の学生が自分自身の成長の糧として活かしていくのかは、結局のところ、学生個人の問題である。とはいえ、大学の教育プログラムの観点からみたととき、少なくとも学んだことを自身の中で定着させるための手助けとなるプロセスが求められる。それが、事後学習の役割である。今回の教育プログラムの流れを図式化すると以下のような図となろう。





この学外授業の場合、事後学習は、大学所定のA4一枚の「ボランティア活動参加報告書」だけでなく、課題レポートの提出を求め、自らの体験をより深く考え直すことを期待した。レポートの課題は以下である。

1. 今回、現地に行き活動したことで印象に残っていることを3つ挙げ、印象に残っていることの中でひとつを取り上げ、あなたが感じたこと、そして、考えたことをまとめてください。
2. さらに今回の学外授業で学んだことを、今後どのように活かしていきたいと思っているのかについて、述べてください。800～1000字。

これらの課題に取り組んだ学生達のボランティア活動報告書は、報告書集として刊行し、参加者全員に配付した。後日、冊子としてまとめ、全員に配ったことで、個々の体験を共有する機会を参加者に提供できたのではないだろうか。

学外授業後、10月25日の昼休みを利用して国際学部教務委員会主催で学内において宮城ボランティア活動に関する報告会を開催した。報告会では、学外授業中に学生達が撮影したビデオを編集して上映し、学生に体験談を報告してもらった。時間の都合上報告者を学生1名に限ったため、参加学生全員が関わるものとはならなかったものの、報告会は参加者にとって1ヵ月前の自分達のボランティア活動を振り返る、良い機会となったのではないかと思われる。

## 2 学生の体験記

### ①名取市の被災状況

本学がボランティア活動の拠点とした名取市は、表3のような被災状況であった。

死者の大半が大津波の犠牲による。東日本大地震による大津波で大きな被害を受けた名取市閑上地区の視察は、前述尚綱学院大学庄司氏の案内で特別に視察許可を得て実現した。その頃はまだ車両が自由に出入りできる場所ではなかったからである。現地では、日和山ひよりやまの頂上に登り、亡くなった方々に黙祷を捧げた。現地視察の様子について、当時次のよ

表3 東日本大震災における被害等状況

---

直接死：911人
災害関連死：32人
死者数の合計：943人
行方不明者数：52人
避難者数：0人
避難所数：0
住宅、建物被害(全壊数+半壊数)：3930棟
仮設住宅建設完成戸数：910戸(完成度100%)
仮設住宅建設箇所(団地数)：8

---

(出所) 宮城県HPより(2012年7月31日時点)。

うに書き記している。

現地に入ると、目の当たりにする光景に学生一同言葉を失っていました。今も回収されず放置されている漁船やボートがちらほら残るとともに、あちこちで瓦礫の山が連なり、地区一番の小高い丘日和山よりも大きくそびえ立っていました。地区の鎮守の神社閑上湊神社がある日和山から辺り一面を見渡しましたが、かつて涼やかな松原が広がり、家並みが美しかった風光明媚な地域は、海岸線まで家一軒残らず真っ平らで、松原は見る影もありませんでした。3階建ての建物を呑み込む津波は、神社の社殿をも押し流しており、現在そこには鎮魂の卒塔婆が祀られていました。(敬愛大学HP内「国際学部だより」「学外授業@宮城県(2011年9月21～23日)」より)

尚綱学院大学庄司氏による、3・11前の閑上地区の穏やかな暮らし、3・11当日のこと、そして震災から半年後の現状と復興に向けての人々の思いについての話は、津波の爪痕が生々しく残る光景を前に、すべての学生達の胸を打った。

## ②学生達にとっての閑上地区視察

閑上地区視察は、学生達にも非常に強い印象を与えるものとなった。それは、学生達が提出した報告書においても顕著であった。課題の中で、学生達が印象に残ったことを列挙してもらったのであるが、ボランティア活動と同数、彼らが目にした閑上地区の光景が挙げられていた。学生

の報告書からいくつかその文章を拾ってみよう。

- 日本のことわざ『百聞一見にしかず』は本当だった。テレビや新聞などを見るより、実際、現場を見たら本当にびっくりした。(1年・男子留学生)
- 大地震から訪問当日までに、散々テレビのニュースで見てきた被災地。それは、津波が町に押し寄せてくる瞬間や、その津波から必死に逃げようとする人々、そして津波にのまれ跡形もなくなった多くの町の映像だった。テレビの画面を通して幾度となく見てきた悲惨な光景だが、それでも実際に自分の目で見た衝撃と映像とはほど遠いものだった。いつ回収されるかもわからない漁船やボートが、田んぼに突きささっている。撤去するのに20年はかかるといわれているがれきが山のようにそびえたっている。津波の直前まで立派に建てられてあったであろう家の一軒一軒が、基礎だけを残して消えている。あまりにも悲惨すぎる光景を目の当たりにした私は、言葉を失うどころか写真を撮る事さえ恐ろしくなってしまった。この学外授業に参加する前から、私は被災地の様子のある程度は理解しているつもりだったが、知らないことの方が多く、実は全然わかっていなかったと、今回のボランティアでつくづく実感させられた。(3年・男子学生)
- 9月22日宮城県名取市の津波被災現場を見たことです。テレビで見るとてもひどい状態で、普通の道に船などが未だにありました。津波は建物の高さ3階くらいまでの大きなものだったと聞きとても驚きました。瓦礫の山を見ると津波の恐ろしさが伝わってきました。現地の方々に話を聞いてみると、元通りに復興するまでに20年くらいはかかるそうです。(3年・男子学生)
- 台風の影響で道路が所々冠水していましたが、テレビで見たとおり、漁船が田んぼの中で横転しており、津波で被害を受けた民家はブルーシートで覆ってありました。他にも電柱が傾いており、道路が未だに通行禁止になっているところも何ヵ所かありました。漁船は業

者に多額の料金を払わないと撤去して港に戻すことができないそうです。大きな船会社の漁船はすぐに撤去できたそうですが、一般の漁船は震災の影響で漁師の仕事がなくなり苦しい状態で料金を払うことができないそうです。また、民家や他の建物の高さよりもがれきの山の方が高いことに私は目を疑いました。その時、私は「震災は人の命だけでなく、仕事や大切なものまで奪ってしまうのか」と自然に対してやるせない気持ちと改めて震災の恐怖を感じました。

(3年・男子学生)

いみじくも学生が「百聞は一見に如かず」ということわざを挙げて自らの衝撃を表現しているが、東日本大震災後6ヶ月後の被災地の光景に動揺しない者はいなかった。学生達が指摘するように、テレビやインターネットの映像を通して接している事実であったとはいえ、直接目にするという体験は非常に重いものであったからである。東日本大震災は語り継がれていく世紀の災害である。この大震災を同時代にもつ私達は、自然との共生、災害と暮らし、命の重さについて考えていかざるをえない。被災地視察を通して、学生達が何よりも現場を知ることの大切さを学んだことは何ものにも代えがたい経験となった。

### ③ボランティア活動

閑上地区視察後、かつてその地に居住していた方々が現在住む愛島東部仮設住宅に移動した。仮設住宅の屋内外において実施したボランティア活動は、それぞれの学生にとって充実したものとなっただけでなく、そこで体験した現地の方々とのふれあいは、心の温まるものとなった。それでは、仮設住宅におけるボランティア活動で学生達はどのような学びを得たのだろうか。

学生達の報告書を読むと、冷たい雨の中で踏み固められた地面に花壇を造るという最も過酷な活動に従事した学生達の達成感が際立っていた。愛島を後にする前、学生達が集会所前に造った花壇（「敬天愛人花壇」と命名）にはピンク色の花を咲かせるバラが植えられた。バラを見て住人の

方々が嬉しそうな表情を浮かべながら、感謝の言葉を掛けてくれた体験は、学生達にとっても大きな喜びとなった。

花壇造りと並んで学生達の印象に残ったことは、現地の方々との交流であった。仮設住宅に暮らす人々だけでなく熱心にボランティア活動に取り組む尚絅学院大学の学生達と膝を付き合わせて話す時間をもてたことで、学生達はそれまで自分達が抱いていた被災者に対する固定観念を打ち破られる体験をしている。特に、交流会で学生達と同世代の尚絅学院大学の男子学生が語った彼自身の被災時の体験談は、すべての学生の心に強く響いた。学生達の報告書は、こうした現地の人々との交流が自分達の言動や考え方を見つめ直す機会となったことを明確に記している。これは多くの学生の報告書からうかがえる変化である。先ほどと同様に学生達の報告書から、言葉を拾ってみよう。

○雨の中、私達は花壇を造り始めました。地面を掘り返して、肥料や土を敷いてから、水仙やチューリップの球根を植えました。雨の影響で掘った穴に水がたまってしまいうまくいかない時もありましたが、無事に花壇を造ることができました。この植えた球根は来年の春になるときれいな花を咲かせてくれると思います。仮設住宅の人達がこの花を見て、すこしでも心が癒されてもらえたらなと思います。私にとってこんなに必死になにかに取り組むというのは、とてもひさしぶりの事でした。みんなで協力して誰かのためにできることはとてもいい経験でした。(3年・男子学生)

○初めて集会所に行った時の高齢者の方達の笑顔が忘れられない。受け入れてもらえるか不安だったことと閑上地区の視察後だったこともあり、被災地の方々のつらさを量り知れずにいたので、皆さんの心の強さや温かさに涙が出そうになった。皆さんはお話をしていくうちに、折り紙の折り方から今のご家族の様子までお話ししてください、そしてお菓子や外に植えられた花々を見て何度も感謝の言葉を言ってくださった。愛島の方々は、仮設住宅での生活で不便なことやつらいことが多々あるはずなのに、今いる場所を自分達で楽し

くし、どんな小さなことにも感謝の心を忘れないで暮らしているのだと感じた。それは皆さんが時々言っていた「生きていることに感謝」という言葉からもうかがえた。また周りの人との繋がりも元気の源のようで、本当に皆さん仲が良かったように思う。震災から半年以上がたった今、被災地の方々は現状を受け入れるということは難しくとも、生きていることを大切に力強く前向きな生活をしようとしている気持ちをその姿から感じさせていただいた。(3年・女子学生)

○彼の話の中で一番心が痛んだのは、「頑張れ」という言葉の意味でした。被災地の人に簡単に頑張れなどと口では言えるが彼らにとっては、とても辛い言葉だと聞かされて、たしかに自分も同じ状況だったら嫌な言葉だと思いました。よく「頑張れ日本」という言葉があるけれども、この言葉は頑張っている人達には場合によっては言われたくない言葉なのかもしれません。(3年・男子学生)

○今回のボランティア活動で学んだことは、被災者(相手)の気持ちになることの大切さです。地震が発生して以来、テレビやラジオ・新聞や広告で「がんばれ日本」や「がんばれ東北」の言葉をよく見聞きしており、私には被災地を励ます良いエールだと考えていました。しかし、最終日の交流会の時に尚綱学院大学の学生の方が「有名人や政治家は私達にがんばれというけれど、何をがんばればいいんだ。もっと私達の現状を考えてほしい」と涙交じりに話していて、私はたった一言の言葉でも被災者の方々は荷が重くなってしまったり、先の見えない不安に駆られてしまうことに気がきました。ボランティア活動では相手の立場に立って、慎重に言葉を選ぶべきだと学びました。(3年・男子学生)

鬱病患者に対して「がんばれ」といった励ましの言葉が禁句であることは知られているが、日本社会では、相手を思いやり応援しているという意味を込めて、頻繁に「がんばって」という言葉がけは行われがちである。東日本大震災後、テレビや新聞等のマスメディアにおいて、盛ん

に「がんばれ日本」「がんばれ東北」といった応援メッセージが流れており、おそらく多くの学生達が、被災者に向けて「がんばれ」という言葉を違和感なく使っていたものと思われる。しかし、よい言葉であっても、時と場所を違えれば逆効果にもなりうる。言葉は自分の思いや考えを他者に伝える道具であるが、一方通行であれば意味がない。学生達は、自分が相手の立場に立って考え、言葉を発することが出来ていたのか、集会所における交流会は自省を促す機会となったようである。

### 3 学生達の学び

ボランティア活動の教育効果は、短期的には学習態度、行動原理や考え方の変化、長期的には生き方や職業選択の変化として表れうる。学生達の場合、短期的にどのような学びを得たのかについて、直接彼らの言葉を紹介したい。

- 現在、私は小学校教員を目指している。そして、将来、被災地のアルバムを道徳の授業の中に取り入れ、子ども達に見せ、東日本大震災の被災地の現状と、ボランティア活動の大切さを彼らにわかしてもらいたいと考えている。(2年・男子学生)
- 今回のボランティアでは震災の大きさや、これからどのように復興していけばいいのかなどさまざま考えさせられた。しかし一番学んだことは考えるだけではなくて実際に行動を起こさなければならないこと。実際に見たり聞いたりすることが大事だということだった。被災者の方々の思いや、自分の感じたことを忘れないようにしたい。またこの体験を語り継いでいくことがこれからは、必要であると感じた。(3年・女子学生)
- 正直、帰ってきた今の方が「もっとやれることがあった」と後悔する事の方が多いが、被災地へ行き貴重な話が聞けた事で自分の災害時の行動を見直し考える機会にもなった。また「頑張って」と応援するのではなく、「助け合おう」とする気持ちが一番大切なのだと知った。大金をもっていない学生の私でも、携帯やパソコン、新聞等

の被災地を知る情報源はたくさんある。それらをこまめにチェックする事で直接行く事はできなくても、被災地の方々のためにできる限りの支援をし続けていきたい。(3年・女子学生)

○「被災地の様子を伝えることも立派なボランティアだ」と被災者の方々がおっしゃっていた。この言葉の通り、私達にはこれを伝える義務があると思う。「自分は被害にあっていないから関係ない」ではなく、みんなでこの事実を受け止めていく必要がある。「たかがそんなことで」、と思うような事でも、それが被災者のためになるなら、その「たかが」をこれからも続けていきたい。そして機会があればまた被災地に行き、もっとたくさんボランティアをしたいと思っている。(3年・男子学生)

○今回の学外授業では、まず人との接し方や傾聴の仕方、コミュニケーションの取り方を肌身で学び、さらに今回の大震災の被害を実際に目で見て現地の方のお話を聞くことができた。今後は仕事に就いた時などさまざまな人に出会う時に、この学びを思い出して初対面の人と接していきたい、また、良好な人間関係を築いていきたい。さらに、実際に見た被災地の様子を多くの人に伝えていきたいと思う。(3年・女子学生)

○私達は被災者に対する言葉使いには気をつけなければならないと思いました。そして、自分にはこれから被災者のために何かできるか？ と真剣に考えました。答えはまだ見つけられません。しかし、今の自分がどのぐらい恵まれているのかは気付きました、そして自分が勉強や仕事に対してもっと頑張らないといけないと気付きました。有意義な3日間を過ごしました。本当に参加して良かったと思います。(4年・男子学生)

○私はこのボランティア活動で人と人との助け合いや励まし合いがいかに大切かを学びました。というのも、初めは無理だと思うようなことでもみんなが声を掛け合い協力し合えば目標が達成できるということを経験することができたからです。今回の学外授業で学んだ



ことは、これからの日常生活においても仕事においても常に活かせるものです。特に仕事においては助け合う事がとても重要となってくると思います。私はこのボランティア活動で学んだことを常に頭に入れ、最後の学生生活を送りたいと思います。そして卒業後もこのボランティア活動のことを思い出し仕事にも活かしていきたいと思います。(4年・男子学生)

小学校教員を目指している学生の場合、自分自身のボランティア体験を教育の現場に活かしていきたいとの明確な意思を表明している。教育現場では、教える側も教えられる側もボランティア体験が貴重な学習機会となっていることを図らずも示している。実際、ボランティア・ツアーを引率した筆者自身、被災地において被災した方々との交流の中で改めて「生きる」ことについて学ぶことが多かった。そして、人のもつ強さ、人と人との交流や協力が生み出すものの大きさ、互いに思いやることの大切さ、感謝の輪に対して、大きな感慨を覚えた。その一方で、善意がともすれば自己満足に陥りがちなボランティア活動の中で、悔いの残ることも多々あった。短い活動時間とはいえ、現地でもっと色々やれることがあったのではないか、という自責の念は強かった。引率者が感じた複雑な思いは、多くの学生達にも見受けられた。それはこの3日間の体験を通して、彼ら一人一人がどれほど多くのことを感じ考えたのかをつづった報告書にも表われていた。

### 3. 事後学習後

報告書の提出をもって学外授業の事後学習は無事終了したのであるが、その後国際学部の参加学生達が協力して、大学祭(敬愛フェスティバル、11月12日・13日開催)においてボランティア活動写真展を実現させた<sup>(4)</sup>。写真展では、現地で撮影したビデオ上映会も並行して行い、10月の短い学内報告会では伝えきれなかった被災地の今、仮設住宅に暮らす人々の笑顔や、尚綱学院大学学生と本学学生とのあいだの交流会の様子を学生達

の手で伝えるものとなった。準備段階において、主に8名の学生達が役割を分担し互いに協力しながら、上映ビデオの編集、写真展の企画や写真の選定、写真の説明文作成、ポスターの制作を行った。写真展前日の展示作業および大学祭当日の会場案内や上映ビデオの解説には、それ以外の学生達も加わった。結果的に、宮城ボランティア活動に参加した国際学部生の14名が、何らかの形で大学祭の展示に関わったことになる。

そもそもこの大学祭において写真展を行うきっかけは、2005年アメリカを襲ったハリケーン・カトリナ災害についてのルイジアナ州立博物館の企画展および災害時の記録写真を取り上げた3年ゼミナールにおける何気ない会話からだった<sup>(5)</sup>。ボランティアに参加したゼミ生と、私達が見て聞いた東日本大震災の被災地の現状を大学祭のような場所で伝えられたら、という話をしていたところ、賛同する学生達が集まって大学祭の企画展として結実したのである。数人で始まった企画であったが、日を追うごとに友が友を呼ぶ形で、参加学生が増えていき、当初考えていたものよりも本格的な写真展へと発展した。大規模な写真展が実現できたのは、宮城ボランティア活動の引率にもあたった大学運営室の職員、八代潔紀氏が中心となって大がかりな展示スペースを組み立ててくれたからこそであった。

展示内容は「被災地は今」「花のある暮らし」「心をつなぐ語らいの時間」「尚絅学院大学の協力」「『がんばれ』という言葉の重み」「チーバくんと遊ぼう」「ボランティアに行っただこと」という7つのテーマからなり、セクションごとにキャプションボードを付け、随所で学生達のメッセージボードがちりばめられた。さらに、ビデオは、巨大津波の被害を受けた名取市閑上地区視察を中心に編集した「Ⅰ.被災地編」と学生達のボランティア活動の様子をまとめた「Ⅱ.ボランティア活動編」の2本を上映した。ビデオ上映は、学生達の体験談や解説を交え、写真だけでは伝えきれない現地の活動を動画で振り返るものとなった。

写真展では、多数の方々が押し寄せるほどの人出ではなかったものの、会場に備え付けたノートには、来場者から次のようなメッセージが書き

記されていた。「こういった活動をこれからも続けてほしいです」(会社員)、「被災地のことを伝えてくれてありがとう」(70歳代宮城県被災者)、「被災者の笑顔を見られてよかったです。交流会、現地の方が喜んでたと思います」(専門学校生)、「大変感動しました。宮城の方々も喜んだと思います」(専門学校教師)。また、学生達は来場者の方々との対話を通して自らの体験を振り返り、今後自分達に何ができるのかについて、それぞれ考えさせられることにもなった。

ところで、ボランティア活動に参加した際にはそれほど積極的ではなかった一部の学生達も巻き込んで実現した企画展を作りあげる原動力になったのは、「被災地の様子を伝えることも立派なボランティアだ」という被災者からの言葉だった。当時、全国的に東北への災害ボランティア活動が華々しく行われている中で、現地に行って何かをしなくてはいけないのに、していないという焦りや後ろめたさを学生達は抱いていたように思われる。しかし、実際に現地に行ったことで、被災地における活動だけがボランティア活動ではないということを学生達は学んだ。しかも、被災者の方々から、私達のことを忘れないでほしい、私達や現地のことを千葉に帰ったら周囲の人達に「伝えてほしい」との思いを託されたのである。現地情報は常にテレビやラジオ、新聞・雑誌、インターネットで伝えられる。しかし、個々の立場で現地を見て感じ考えたことを、それぞれの学生がひとつのメディアとなって自分の周囲に伝えることも、現地に行った者としての使命だということを学生達は学んできた。ささやかなことかもしれないが、被災者の方々との出会いを通して彼らは自分達にできる社会との関わり方を学ぶとともに、学外授業後、自分達にできることから始める、をまさに実践したのである。

## おわりに

平成23(2011)年度の学外授業、宮城ボランティア・ツアーは、自分一人の力では無力でも仲間と協力すれば何かができるという実感を得て予

想外に大きな学びを学生達にもたらした。事後学習後の学生達の情報発信活動は、主体的な地域との交流や学生の社会参加を実践するものとなった。大学が主催するボランティア・ツアーは、大学側が事前に行き先や活動を含め、現地との間で活動内容を調整している。参加に至る学生の自発的行動は、応募にとどまるだろう。第1回の学外授業の場合、授業後、授業単位とは関わりなく、参加した学生達が協力して大学祭における企画展示を成功させるという、新しい活動のフェイズが生まれた。それだけの教育的効果が被災地におけるボランティア・ツアーにはあった。大学の社会貢献、被災地支援という観点から見れば、本学のような単発的な被災地ボランティア・ツアーは高く評価されるものではない。しかしながら、ボランティア活動の授業への取り組みとその教育効果という観点で見たとき、その成果は極めて大きい。近年日本においても、ボランティア活動を構造的な学習枠組みの中で捉え直す「サービス・ラーニング」という教育プログラムが注目されている<sup>(6)</sup>。被災地における学外授業とその後の学生達の活動を振り返ってみたとき、意図したわけではなかったが、大学主催の被災地ボランティア活動は、サービス・ラーニングのひとつのプログラムとして優れていたのではないかと考えている。また、利他的で公共精神を涵養するボランティア活動は、本学の建学の精神である「敬天愛人」を実践するもので、この精神を被災地ボランティア活動は体現するものであったということも指摘できよう。初年次の経験をふまえ、平成24(2012)年度の第2回目では、ボランティア活動の動機付けおよび学習目的を明確にさせる事前学習、被災地におけるボランティア活動の実践、活動内容の振り返りとなる事後学習に関して、より体系的な学習の枠組みで、宮城ボランティア・ツアーを捉え直したいと考えている。この第2回大学主催宮城ボランティア活動に関しては、別稿<sup>(7)</sup>にて改めて検討する。

機会があれば東北へ行き、再びボランティア活動に参加したい、あるいは、何らかの形でこれからも被災者の方々と関わっていきたいという言葉を、第1回学外授業に参加した学生達は口にしていった。ボランティ

ア活動は一過性ではなく継続してこそ意味がある。それは個々の学生にとってだけでなく、大学にとっても同様であろう。

【付記】

本研究ノートは、平成24年度敬愛大学研究プロジェクト「大学における震災ボランティア教育の実践研究」の成果の一部である。

(注)

- (1) 朝日新聞大阪本社「阪神・淡路大震災誌」編集委員会編『阪神・淡路大震災誌——1995兵庫県南部地震』、朝日新聞社、1996年、403ページ。
- (2) 文部科学省ウェブサイト「大学における教育内容・方法の改善等について」、「大学における教育内容等の改革状況について（概要）」（平成23年8月24日）〈[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/\\_icsFiles/afiedfile/2011/08/25/1310269\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afiedfile/2011/08/25/1310269_1.pdf)〉。
- (3) なお、宮城での活動を終えた後に、尚絅学院大学人間心理学科太田健児教授および同大学庄司則雄氏を招いて、2012年2月23日日本学主催のシンポジウムが開催された。詳しくは、敬愛大学HP「国際学部だより」内の記事「シンポジウム『東日本大震災1年を前にして』」（2012年2月23日）、参照。
- (4) 詳しくは、敬愛大学HP「国際学部だより」内の記事「宮城ボランティア活動写真展を終えて」（2011年11月18日）、参照。
- (5) ルイジアナ州ニュー・オリンズにある州立博物館（Louisiana State Museum）では、2010年10月23日より特別展「ハリケーンと共に生きる——ハリケーン・カトリーナとその後」（“Living With Hurricanes: Katrina and Beyond”）を開催し、ハリケーン・カトリーナ災害を多角的に検証するとともに、復興に向けての取り組みを紹介し、全米でも高い評価を受けている。*Hurricane KATRINA: 5 Years and beyond*, Harahan, LA: Express Publishing, 2010.
- (6) サービス・ラーニングに関しては、さしあたり、次の文献が参考になる。桜井政成・津止正敏編著『ボランティア教育の新地平』、ミネルヴァ書房、2009年。
- (7) 櫛田久代・池谷美佐子・庄司真理子「研究ノート：大学主催ボランティア・ツアーと教育プログラムの課題——敬愛大学国際学部の場合」『敬愛大学総合地域研究』第3号、2013年所収。

(参考文献)

桜井政成・津止正敏編著『ボランティア教育の新地平』、ミネルヴァ書房、2009年。  
朝日新聞大阪本社「阪神・淡路大震災誌」編集委員会編『阪神・淡路大震災誌——1995兵庫県南部地震』、朝日新聞、1996年。

*Hurricane KATRINA: 5 Years and beyond*, Harahan, LA: Express Publishing, 2010.

杉岡秀紀・久保友美「〈研究ノート〉関西を中心とした大学ボランティアセンターの現状・課題、展望——サービス・ラーニングという新潮流を踏まえて」同志社大学『社会科学』、2007年、129-158ページ。

上畑良信「大学の教育課程と学生のボランティア活動：その教育的意義と若干の具体化方策」長崎県立大学論集 40(1)、2006年、57-80ページ。

文部科学省ウェブサイト「大学における教育内容・方法の改善等について」、「大学における教育内容等の改革状況について（概要）」（平成23年8月24日）〈[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/\\_icsFiles/afiedfile/](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afiedfile/)〉

2011/08/25/1310269\_1.pdf)。

宮城県庁 HP 震災被害情報「地震被害等状況及び避難状況」2012年8月8日公表。  
〈<http://www.pref.miyagi.jp/kikitaisaku/higasinihondaisinsai/higaizyoukyou.htm>〉。

敬愛大学「2011年度敬愛大学学外授業活動報告集」。

敬愛大学 HP 内「国際学部だより」内「学外授業@宮城県(2011年9月21～23日)  
〈<http://www.u-keiai.ac.jp/international/20100720162948/20110727135132/20110924173427/index.html>〉。

同「宮城県ボランティア活動報告会」(2011年10月25日)〈<http://www.u-keiai.ac.jp/international/20100720162948/20110727135132/20111026084752/index.html>〉。

同「宮城ボランティア活動写真展を終えて」(2011年11月18日)〈<http://www.u-keiai.ac.jp/international/20100720162948/20110727135132/20111119173640/index.html>〉。

同「シンポジウム『東日本大震災1年を前にして』」(2012年2月23日)〈<http://www.u-keiai.ac.jp/international/20100720162948/20110727135132/20120229090516/index.html>〉。